ホリー・ブラック 作
トニ・ディテルリッジ 絵
飯野眞由美 訳

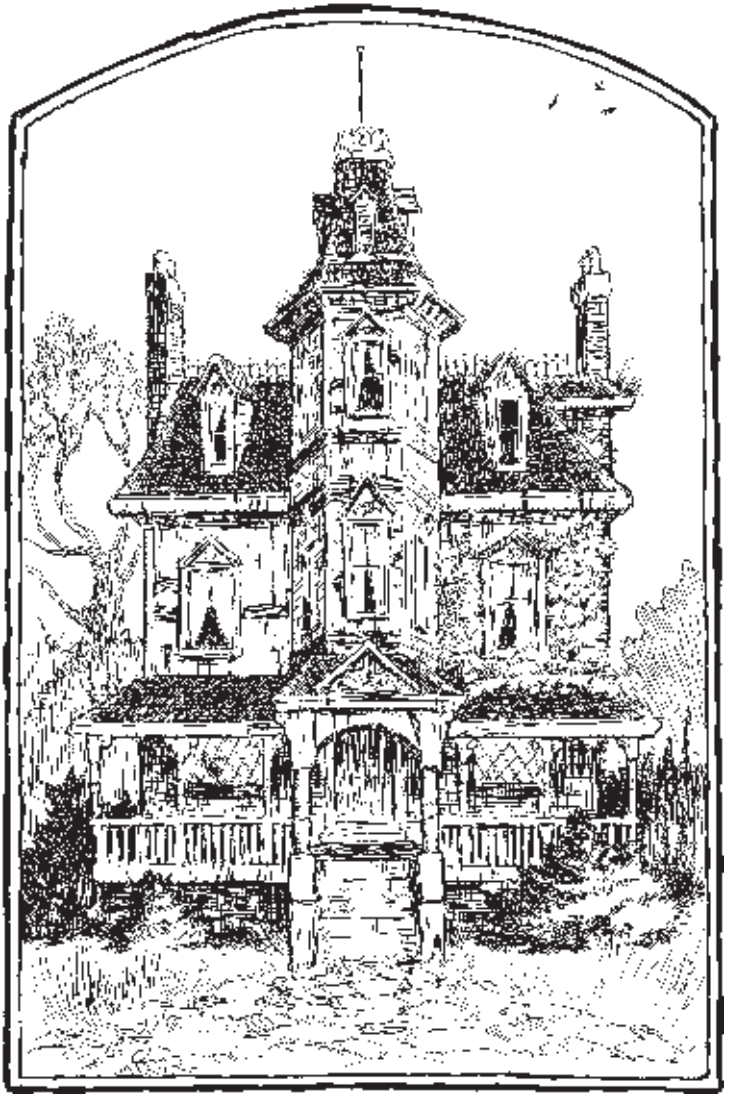
文溪堂

1　ぼろぼろのお屋敷

将来きみの弟とお姉さんは何になるのかときかれたら、ジャレッド・グレースはすぐにこたえられるだろう。弟のサイモンは動物のお医者さんかライオン使い。姉のマロリーは、フェンシング選手になってオリンピックに出るか、だれかを剣でつきさしてろう屋に入るかのどちらかだ。でも、自分が将来何になるのかはわからなかった。だれもジャレッドにそんなことはきかなかったし、いつだって、ジャレッドの意見をきいてくれる人などいなかった。

この新しい家のことだってそうだ。ジャレッドは家を見あげて、目を細めた。ぼやけているほうが、まだましに見える。

「ぼろぼろの家ね」



ステーションワゴンからおりながらマロリーがいった。でも、少しだけちがう。ぼろぼろの家をいくつもつみかさねたような家、といったほうがいい。煙突が何本もあり、屋根のてっぺんは鉄柵でかざられ、ものすごく派手な帽子をかぶっているみたいだ。

「でも、なかなかすてきでしょ。ヴィクトリア朝様式のお屋敷だもの」

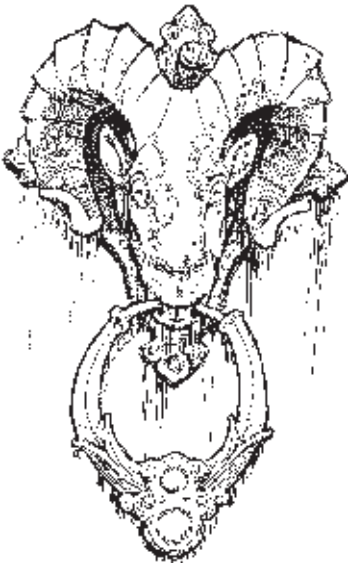
おかあさんはそういって、にっこりして見せた。でも、笑顔が少しこわばっているような気もする。

ジャレッドのふたごの弟サイモンは満足しているようだ。この家で飼えそうな動物のことでも考えているのだろう。たしかに、ニューヨークではふたりのせまい部屋に動物たちをつめこんでいたが、もうぎゅうぎゅうだった。でも、ここならウサギだろうとハリネズミだろうと何だろうと、サイモンの好きなだけ飼う場所がありそうだ。

「ジャレッド」

サイモンがよんだ。気がつくと、みんなはもう玄関前にいて、つっ立って家をながめているのはジャレッドひとりだった。

ドアはぼろぼろで、色がなくなって灰色だった。ペンキは、ひび割れの中と蝶つがいのまわりに、クリーム色らしいものがこびりついて残っているだけだ。羊の顔のさびたドアノッカーが、中央の一本のがんじょうな釘で打ちつけられている。



おかあさんはぎざぎざの鍵を鍵穴にさしこんでまわし、肩で力いっぱいおしてドアをあけた。

家の中はうすぐらかった。窓は階段のとちゅうにひとつあるだけで、そのステンドグラスからさしこむ光が、壁にうす気味悪い赤っぽい模様をうつしだしていた。

「何もかも、あのころのままだわ」

おかあさんはなつかしそうにいった。

「前よりぼろになったでしょ」

マロリーがそっけなくいった。

おかあさんは黙ってため息をついた。

玄関からろうかを行くと、ダイニングルームに出た。あちこち腐って変色した長いテーブルがひとつあるきりだ。しっくいの天井はところどころひび

が入り、シャンデリアをつるしているワイヤーはけばだっていた。
「さあ、車から荷物を運んできなさい」
おかあさんがいった。
「ここに？」
ジャレッドがきいた。
「そうよ」
おかあさんはスーツケースをテーブルの上においた。もうもうとほこりがまい上がったけど、気にしていないようだ。
「ルシンダ大おばさんがこの家を使わせてくれなかったら、わたしたちどうなっていたかわからないわ。感謝しなくちゃ」
だれも何もいわなかった。感謝するべきなのだとわかっていても、とてもそんな気持ちにはなれなかった。おとうさんが出ていってから、ろくなことがな

い。ジャレッドは学校でなぐりあいのけんかをして、左目のまわりに青あざをつくった。そのあざの跡を見るたびに、けんかのことを思い出した。

でも、これはもっと悪い。いくら何でもひどすぎる。

車の中から荷物をおろそうと、サイモンの後について行きかけたときだった。

「ジャレッド」

おかあさんがよんだ。

「何？」

おかあさんは、ほかのふたりがろうかに出るまで待っていた。

「これは、やりなおすチャンスなのよ……わたしたちみんなにとって。いいわね？」

ジャレッドはしかたなくうなずいた。おかあさんがいいたいことはわかる。

ジャレッドが学校からおいだされずにすんだのは、すぐに引っ越すことになっていたからだ。このことでも、大おばさんに感謝しなければならない。でも、やっぱりそんな気持ちにはなれなかった。

外では、マロリーがトランクの上にスーツケースをふたつつみかさねていた。

「何も食べようとしないんですって」

「ルシンダ大おばさんのこと？　年だからね。年をとりすぎて、おかしくなっちゃったのかな？」

サイモンがいった。

マロリーは首をふった。

「おかあさんが電話でテレンスおじさんと話しているのをきいたんだけど、大おばさんは小さな妖精たちから食べ物をもらってるっていったそうよ」

「何いってるんだよ。いくら大おばさんが精神病院にいるからって、でたらめばっかり」
ジャレッドが口をはさんだ。でも、マロリーはかまわず話しつづけた。
「妖精の食べ物は、あなたたちが知っているどんな料理よりもおいしいのよって、お医者さんに話したらしいわ」
「まさか。うそでしょ」
サイモンは後部座席にもぐりこんで、スーツケースをひとつあけた。
マロリーは肩をすくめた。
「信じないんならいいわよ。でも、大おばさんが死んだら、ここはべつの人のものになって、あたしたちはまた引っ越さなきゃならないのよ」
「そしたら、ニューヨークにもどればいいじゃないか」
ジャレッドがいった。

「それは無理だと思うよ」
サイモンはチューブソックスの束をとりだした。
「大変だ！　ジェフリーとレモンドロップが、ソックスをかみきって逃げだしちゃった！」
「ネズミはつれてきちゃだめって、おかあさんがいったでしょ。ここでは〈ふつう〉の動物だけ飼うようにって。きたないから、捨てなさい」
マロリーが顔をしかめていった。
「逃がしたりしたら、ネズミ捕りにつかまっちゃうよ。マロリーだって、フェンシングのがらくたをいっぱい持ってきてるじゃないか」
サイモンはソックスを裏がえし、穴から指をつきだした。
「がらくたなんかじゃないわよ、失礼ね！　おかあさんがいったのは、ネズミを……」

「しつこいな。いいかげんにしろよ」
ジャレッドがわってはいった。ネズミを捨てさせられては、サイモンがかわいそうだ。でも、すぐに後悔した。
「あら、もう片方の目にも、あざをつくってほしいの？」
マロリーがジャレッドのほうをむいた。そして、重いスーツケースをジャレッドの手におしつけた。
「あたしをどなりつけるほど強くなったんなら、これを運んでいってちょうだい」
いつかはマロリーより背が高くなって、力も強くなるはずだ。でも、十三歳と九歳の今は、まったく想像がつかなかった。今はどうしたってかなわない。しぶしぶスーツケースを運びはじめた。
一度も下におかないで、何とか玄関の中まで持ってこられた。

あとはずっと引きずっていってやれ。だれにもばれやしないさ。

ところが、ひとりで玄関に立ったら、ダイニングルームがどっちだかわからなくなってしまった。ろうかが二本にわかれ、半円を描いて家の奥までつづいている。

「おかあさん？」

大きな声を出したつもりだったが、自分でもなさけないくらい弱弱しい声だった。

返事はない。おずおずと、一歩、また一歩と足をふみいれていく。足もとの床がギーと音をたて、びくっと立ちどまった。

そのとき、壁の中でカリカリという音がした。爪をひっかけて上っていくみたいな音。天井を通りすぎて、音はきこえなくなった。心臓が激しくうち、胸が苦しくなった。

『ただのリスだよ』ジャレッドは自分にいいきかせた。

今にもくずれおちそうな家だもの、何が住んでいたっておかしくないさ。地下室にクマがいたり、セントラルヒーティングの管の中を鳥が飛びまわったりしていないだけ、ましだと思わなきゃ。ここにセントラルヒーティングがあればの話だけど。

「おかあさん？」

さっきより、もっと小さな声でよんだ。

そのとき、うしろのドアがあいてサイモンが入ってきた。まん丸の目をした灰色のネズミが入った広口びんをふたつかかえている。そのすぐ後ろに、マロリーがしかめ面で立っていた。

「壁の中に何かいたんだ！」

ジャレッドがいった。

「壁の中に？　何が？」
サイモンがきいた。
「よくわからなかったけど……」

ちょっとの間、おばけかもしれないと思ったなんて、知られたくなかった。
「リスみたいだった」
サイモンは目をかがやかせて壁を見つめた。金ぴかの派手な壁紙は、あちこちうきあがったり、破れたり、穴があいたりしている。
「リス？　ほんとに？　この家にリスがいるの？　ずっと前から、リスを飼いたかったんだ」
壁の中に何かいても、ふたりはたいしたことだと思わないようだ。そのままダイニングルームへ行ってしまった。ジャレッドも黙ってスーツケースを運びはじめたが、ニューヨークのアパートがなつかしくてたまらなかった。
あーあ、おとうさんとおかあさんが離婚なんかしなければ、こんなところにこなくてすんだのに。ここには休暇をすごしにきただけで、すぐにもとのくらしにもどれるんだったらな……。

2　壁の中を調べる

雨もりのせいで、二階の床はどこもかしこも腐って危険な状態だった。ろうじて使えそうなのは三部屋だけ……おかあさんが一部屋、マロリーが一部屋、ジャレッドとサイモンが最後の一部屋をいっしょに使うことにした。

荷物を出しおわると、サイモンの側のドレッサーとベッドわきのスタンドはたくさんの水槽にかこまれてしまった。魚がいっぱいの水槽、ネズミやトカゲがつめこまれている水槽、泥の中にかくれている生き物の水槽。

おかあさんはサイモンに、ネズミだけはつれてこないようにといった。ネズミは大嫌いなのだ。

それなのに、サイモンはアパートの下の階に住んでいるレベッテさんの部屋

から、わなにかかったネズミを助けだし、つれてきてしまった。
でも、おかあさんは気がついていないふりをしている。
ジャレッドはごつごつしたベッドの上で何度も寝返りをうった。顔にまくらをおしつけてもみたが、やっぱりねむれない。サイモンの動物たちがたてるカサカサ、キーキー、カリカリという音におびえていた。その音は、壁の中にいた〈何か〉を思い出させる。
これじゃあ、ひとりで寝るほうがましなくらいだ。
ニューヨークでも、サイモンや動物たちと同じ部屋だった。
でも、外の車やサイレンの音、人びとのざわめきなどで、動物の音はあまり気にならなかった。
ここでは、何を見てもきいてもびくびくしてしまう。
ドアの蝶つがいがキーと鳴り、ジャレッドはびくっと体を起こした。

ドアの前に、白い服を着た長い黒髪の人影がぼんやり見える。思わず、ベッドをとびだしてうずくまった。

「あたしよ」

その人影がささやいた。白いねまきを着たマロリーだった。

「あんたのいってたリスの音がきこえたみたいなの」

ジャレッドは立ちあがった。

隠れたりして、怖がりだと思われただろうか、それとも反射神経がいいと思ってもらえただろうか。

サイモンを見ると、もうひとつのベッドの中で小さないびきをかいている。

マロリーは腰に手をあてていった。

「早く。リスはあたしたちがつかまえるのを、じっと待っててくれやしないわよ」

ジャレッドはサイモンの肩をゆすった。
「サイモン、起きろよ。新しいペットだぞ。新しいペ――――ット！」
サイモンはぴくりと体を動かし、うなり声をあげながら、かけぶとんを頭の上まで引っぱった。
マロリーが笑い声をあげた。
「サイモン！」
ジャレッドは顔を近づけて、わざと緊急事態のようないい方をした。
「リス発見！　リス発見！」
サイモンは目をあけて、ふたりをにらみつけた。
「ねむっていたのに」
「おかあさんはミルクとコーンフレークを買いにいったわ」
マロリーはそういって、サイモンのかけぶとんをはぎとった。

「その間、あんたたちを見ているようにっていわれたの。いそがないと、すぐにもどってきちゃうわよ」

三人は新しい家の暗いろうかをそっとすすんでいった。マロリーが先頭に立ち、少し歩いては立ち止まって耳をすませた。ときどき、壁の中から何かをひっかくような、小さな動物が走っているような音がきこえてくる。

キッチンに近づくにつれて、その足音はだんだん大きくなってきた。流しの中に、夕食のマカロニとチーズの残りかすがこびりついた鍋がおいてある。

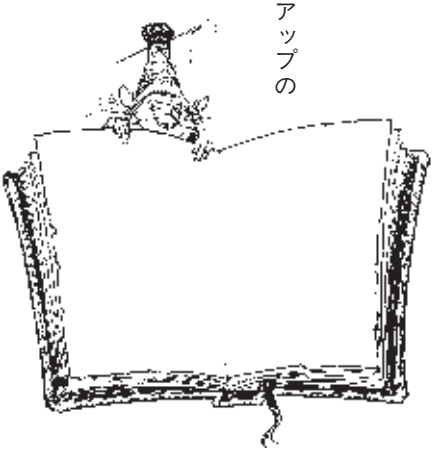
「ここだわ。きいてみて」

マロリーがひそひそ声でいった。

物音はぴたりとやんだ。

マロリーはほうきをとりあげ、柄を上にして野球のバットのようにかまえた。

（つづく）

謎の音の正体をつきとめようとするマロリー、ジャレッド、サイモンたち。
一体、その謎の音の正体は？
そして、三人が引っ越してきたスパイダーウィック屋敷には、まだまだ謎が……。
その最大のものが、お話の最初でこの本の作者におくったという一冊の古い本。
その書を見つけたその日から、グレース家の子どもたち、妖精たちをまきこんだうばいあいがはじまる。

三人の子どもたちと、妖精たちとの真剣勝負。
巻をかさねるごとに危険度アップ、ワクワク度アップの
世界中で大人気のサバイバルファンタジー。